日本赤十字看護学会誌　J. Jpn. Red Cross Soc. Nurs. Sci. Vol.4, No.1, pp.106-114, 2004

実 践 報 告

小児看護学実習における学生と母親の信頼関係に及ぼす影響要因の検討
―学生と母親の言動と実習記録の分析から―

野村　佳代*

The Study of influetial Factors on the Relationship of Mutual Trust between Students and Patient's Mothers in the Clinical Teaching of Pediatric Nursing
―The Analysis of their Behavior and Clinical Teaching Records―

NOMURA Kayo

キーワード：小児看護学実習，指導者の役割，学生の言動，母親の言動，信頼関係
Key Words：Pediatric Clinical Teaching，Role of a Teacher，Student's Behavior Mother's Behavior, the Relationship of Mutual Trust

Ⅰ．はじめに

臨床実習は、専門職としての実践に向けて学生が準備を行うための場所であり、学んできた理論を検証し技術を習得するために、患者と接するという難しい場面である（Gaberon, 2002）。そのために、患者との人間関係が重要となる。したがって、子どもと接する機会が少ない学生であっても、実習の場において子どもを含めた人間関係を築いていく必要に迫られる。

一般的な小児看護学実習の目標として、①小児の成長発達を理解し適切な援助ができる、②疾患の病態生理を理解し小児の発達段階を考慮した看護過程の展開ができる、③小児看護における看護技術及び治療介助を学ぶ、④入院と疾病が小児および家族へ及ぼす影響を理解し保健医療チームの役割について学ぶ、の4つが考えられる（園田, 1995）。本学では子どもの病態生理を理解し、成長発達の著しい子どもの自立状況を把握したうえで、日常生活を送るための看護援助を実践し、評価することに重点をおいた実習を目標として実施している。これは多くの看

*岡山大学医学部保健学科

受付日：2003年 9月 9日
採用日：2003年11月28日

護系大学で実施されている目的と目標であると報告されており、一般的であるが基本的な目標である。

このような目標を達成するためには、子どもとの関わりに焦点を当てた学習内容が重要であると考え、子どもとの関係作りを最優先としている。すなわち学生は子どもへの適切な看護援助を展開するために、看護を実践するうえで基本的な態度を身につけ、よりよい人間関係を培っていくことが求められる。このため指導者は、学生が子どもとよりよい関係を築けるように、その関わりについての観察や関係作りへの支援が必要となる。

しかし、短期間での実習という時間的制約の中で、多数の学生の指導に当たる指導者は知識的にも技術的にも学習の途上にある学生に対して、適切な指導を行うことに困難を感じている。

そのような時に、子どもの一番身近な存在である母親も、子どもについての情報を学生に教えたり、子どもとの関係作りにおいて手助けをするなど重要な存在となっていることを経験から認識した。母親の付き添いがないほうが学生の子どもへの援助がスムーズに行えるという研究報告がある（大木, 1998）。しかし、本学の実習においてはむしろ、母親の存在によって子どもへの援助をスムーズに実施することが可能になっていると考えてきた。

母親が付き添っている形態の実習では、母親とのコミュニケーションが子どもの状態についての情報収集や適切な看護援助を実施するために重要となる。そのため指導者側も母親と学生の会話の成立が、学生と子どもおよび母親との信頼関係の指標となると考えてきた。そして学生と母親との会話が弾んでいることは良好な関係が築け、子どもへの援助の展開に役立つものと認識していた。

ところがある時、「学生さんは私と話すだけで子どもとあまり関わろうとしないんです。だから私も子どもと関わってほしくなくて、あえて私が学生さんと話をしていました。」とある母親の言葉が聞かれた。この母親の言葉は、会話が弾んでいても、学生が子どもや母親と信頼関係を築けているわけではないことを意味していた。すなわち、学生が母親との「お話」に終始し、子どものとの関わりに関心が向いておらず、子どもとだけでなく母親とも関係が築けていないことを示していた。

この出来事によって母親は実習初日から学生を手助けするのではなく、学生の看護援助を実施する態度によって、始めて学生を信頼するようになり、この信頼感によって学生に対する手助けを行なうようになっていくと考えるようになった。そこで指導者として、実習における学生と子どもおよび家族との関わりについて再考し、学生に対して母親からの情報だけではなく学生自身の目で確かめた情報を元に、成長発達と病態生理を評価し、特に生活援助に重点をおいて援助を実践することに焦点を当てるように指導することとした。

そのうえで子どもへの援助計画を立案する際に、自分だけで考えたり母親の許可を得るだけでなく、援助内容を必ず母親と一緒に検討して実施するように促した。この方法を促すようにしてからは、援助について母親のアドバイスや提案そして希望が出るようになり、更には子どもへの思いなどが表出されたりするなど、母親と「お話」をしていたときより、子どもや母親とコミュニケーションが深まっていた。

このように、小児看護学実習において効果的な実習となるためには、母親と信頼関係を築くことは重要である。しかしそのためには子どもに対する学生の関わり方が大きな要因となる。

そこで、学生の関わり方が母親に大きな影響を与えた一事例について、実習中の学生の言動と母親の言動と指導者のアドバイスから、母親の信頼を得る要因となった学生の子どもへの関わり方と、学生を信頼した母親と学生の関係について明らかにする。同時に、学生と子どもと母親との関係作りにおける指導者の役割について検討する。

Ⅱ．研究方法

実習指導者として実習のさまざまな場面において観察した、学生と母親の行動や発言を振り返り、学生の毎日の記録と共に分析する。この

分析から実習における学生の言動と母親の言動が相互の信頼関係に及ぼす影響要因を明らかにする。同時に学生の指導に関わる指導者の役割を検討する。

A．実習形態

1．実習目標

小児看護学実習は、子どもの病態生理を理解し、成長発達の著しい子どもの自立状況を把握したうえで、日常生活を送るための看護援助を実践し評価することに重点をおいた実習を目標として実施している。

本学では正式には母子看護（小児看護学）実習であり、合わせて4単位となっているため、ここでは小児看護学実習と示す。

2．実習場の状況

実習は大学病院の1病棟で実施している。小児内科と小児神経科があり、主に血液、腫瘍疾患、てんかん等の神経疾患が対象となっている。

学生は約10名1グループとして2週間実習を実施している。保育所見学は病棟実習中の半日の見学実習である。

小児看護学実習には実習施設の臨床実習指導者や医系教員も関わっているが、主に看護教員1名が実習場に赴き、その指導に当たっている。このため本事例の指導者は、直接実習指導に当たる教員のことを指している。

B．事例紹介

月齢10か月、体重2,374 g 男児。低出生体重児（在胎週数31週4日、出生時体重1,328g）。先天性皮膚弛緩症、体温調節困難、心室中隔欠損などのために産科に入院していたが、脳波異常と痙攣様発作が認められたため脳神経障害を疑い小児神経科に転科となる。小児神経科では精査の結果、脳波については特に異常を認めず経過観察となっている。

看護チームは、先天性皮膚弛緩症と腹部膨満のため鼠頸ヘルニアを併発していることを問題としてあげており、呼吸を少しでも楽にするために腹部のガス抜きやグリセリン浣腸などを状態に合わせて実施している。このガス抜きは、今後も継続して行う必要があることから、母親が実施できることが重要との考えによって、母親への指導を継続中であった。

子どもは月齢10か月であるが、感情表現は不快な刺激に対して啼泣するが声を出して笑ったり、喃語などは見られていない。運動発達機能は頸定していないためお座りができない。また腹部膨満のために四肢伸展しており、寝返りができずに寝たきりの状態となっている。差し出したものをつかむことができる。また追視は見られず音に対する反応が見られない。このため声かけに対する反応は見られない。

家族は、子どもと両親の3人家族であるが、自宅が遠方であるため入院中は母親のみが看病に当たっており、父親は休日に泊りがけで来る。初めての子どもであり、待ち望んで生まれてきた子どもである。

学生は、子どもが小児神経科へ転科して5日目に受け持っている。これまで子どもとの関わりの経験はなく、保育所実習も実施されていない状況の受け持ちとなった。

C．倫理的配慮

学生が受け持った子どもの家族に対しては研究目的と方法を具体的に説明し承諾を得た。また、学生に研究協力を依頼する際、目的と方法、さらに研究参加と成績とは関係がないことを説明し、承諾を得た。得られたデータは研究が終了時点で破棄することを確約した。

Ⅲ．結果

A．実習1日目

1．子どもの状態

腹部膨満によって呼吸が苦しいためか、絶えず体を後弓させている。ブジーによって少しずつ排ガスが見られているが腹部膨満の軽減への効果はわずかである。

2．母親の言動

受け持ちを予定していた子どもが退院していたことによって、急遽学生実習の受け持ちを依頼し、快諾していただいた。しかし突然の依頼であったことと、学生と初対面で挨拶のみであるため、特に反応は見られない。

3．学生の実習内容

午前中は学内オリエンテーションであり、午後より病棟に入る。実習初日であることから、子どもと家族と対面し挨拶するのみで、それ以外はカルテよりの情報収集となる。

4．指導者のアドバイス

実習初日であることから、病態生理などについて学生からの質問に応じるが、特に指導者からの働きかけはしていない。このため学生はかなり不安そうな様子であるが、まだ初日であるため情報収集を優先して様子を見ることにした。

5．学生の反応

学生は子どもについて自分の予測と現実との違いが非常に大きいために、どのように接してよいかわからないと表出している。

B．実習2日目

1．子どもの状態

前日に引き続き、身体を後屈させ肩呼吸を繰り返している。ブジーの効果もそれほど見られていない。

2．母親の言動

母親はガス抜きが開始された直後で不慣れな実施であり、学生と関わる余裕もない様子である。

3．学生の実習内容

学生は子どもが月齢10か月の乳児としては非常に小さいために、子どもへの接し方がわからないと発言し、ナースステーションから子どもや母親の様子を伺うのみにとどまっており、不安な様子である。

4．指導者のアドバイス

しばらく様子を観察していたが、なかなか子どものところへ行くこともできない様子であるため、学生を伴って訪室し、母親と話しながらガス抜きを手伝ったり、子どもを抱いたりしてみる。そしてそのまま学生に抱かせてみる。

また、子どもの症状からどのような状況にあるかをアセスメントするために、子どもの疾患の病態について理解するように指導する。

5．学生の反応

学生に子どもを抱かせてみたことで、学生はまだ不安な様子であったが笑顔が見られ、子どもに触れることに抵抗がやや減少した様子であった。このことをきっかけに、笑顔で母親と話したり子どもに話しかけたり触れたりするようになる。

C．実習3日目

1．子どもの状態

身体を後屈させ肩呼吸を繰り返している。ブジーの効果もあまり見られておらず、酸素飽和度も80％代後半が持続して呼吸状態も良好といえない。

2．母親の言動

母親は子どものガス抜きを慣れない様子で実施しており、精神的に余裕がない様子である。学生が訪室しても、少し離れたところに立っていることもあって、特に反応する様子は見られない。

3．学生の実習内容

学生はナースステーションでカルテを見ていることが多く、訪室できたとしてもまだ子どもに恐る恐る触るだけであり、子どもと接触することに不安が強い様子である。疾患の病態生理については自己学習しているが、自己学習の内容と子どもの病態生理とが結びつかず、子どもの状態がわからないと発言する。

母親と会話する時、子どもを挟んで母親の反対側に立っているため、子どもを中央において母親が顔を向き合って話している。

4．指導者のアドバイス

学生の不安が強くて子どもに積極的に関われないのは、病態生理を理解できないためと判断し、病態生理と成長発達を理解して適切な看護援助を導くと考えた。そして本来2週目に細かく指導している関連図を、病態生理を中心に描いてみることを指導する。

5．学生の反応

関連図から症状やガス抜きなど実際に行われている援助やその必要性が理解できたことで、学生の固かった表情が明るくなり、積極的に訪室して子どもに話しかけたりと関わることができるようになる。

その日の学生の記録には、「何から手をつけてよいかわからなかったが、関連図を描くことで、

必要な看護が何であるかが理解でき、気分的に楽になり、子どもや母親との関わりを心から楽しめた」と記載している。

D．実習4日目

1．子どもの状態

腹部膨満は軽減しておらず、呼吸状態の改善はあまり見られていない。

2．母親の言動

学生が積極的に関われるようになったことで、話し相手ができて笑顔が見られるようになる。そして子どもの思いなどを学生に語るようになる。

3．学生の実習内容

週末を挟んで2週目の実習となる。2週目の初日は看護目標を立案し、その目標に沿った援助の実施を目的とする。

学生は本来なら子どもに対する目標を立案する。しかし、この場合は母親が子どもに適切に援助ができることが重要と考え、子どもの看病で疲労が見える母親に、笑顔が少しでも出るようになることを目標として立案する。そして具体策としてまず子どもと顔をあわせて話しかける。母親とも目をあわせて話したり、子どもへの援助を励ましたり手伝ったりすることとした。

4．指導者のアドバイス

学生と母親が笑顔で会話を楽しんでおり、母親から子どもの思いが表出されていることから、積極的に介入する必要性が少なくなったと判断し、学生の要望がない限り学生に任せて見守っていくようにする。

5．学生の反応

ケア計画に基づいて、子どもに対して顔を近づけて話しかけたり、母親の思いの傾聴を積極的に実施している。

E．実習5日目

1．子どもの状態

以前から腹部膨満のため呼吸状態は良好といえる状態ではなかったが、ウィルス感染による咳嗽によって呼吸状態が更に悪化している。

2．母親の言動

子どもの状態が思わしくないことから表情も硬く、口数が少なくなり精神的に負担がかかっている様子である。それでも子どもの咳嗽を促したりしている。

指導者に対して「いつもガス抜きのことで頭がいっぱいで、夢でも肛門しか出てこなかったんです。でも学生さんが子どものことをいつも“かわいい、かわいい”と言って接してくれるのを見て、この子が生まれてくるまでのことを思い出しました。本当に楽しみにしていたことを思い出して、この子がかわいいと思えるようになりました」と語る。

3．学生の実習内容

常に病室にいて母親を励まし、子どもに話しかけたり、背中をさするなど咳嗽を促すような援助を実施している。

4．指導者のアドバイス

この日のカンファレンスで、病状が良くない子どもに1日何もできなかったと意気消沈していたため、学生にこの母親の言葉を伝える。

5．学生の反応

子どもの役に立っていないと思いながらただ話しかけるだけであったが、そのことが母親にとっては役に立っていたとわかりうれしいと涙ながらに語った。

そしてカンファレンスに出席した学生みんなでこの母親の言葉について話し合い「まずは子どもに目を向け、心から子どもをかわいがり、愛することによって、母親も信頼してくれる。今学生にできることは子どもと触れ合い、それを通じて母親とも触れ合い、思いを傾聴すること。それは看護師としての大きな役割である」ということを確認しあった。

F．実習6日目

1．子どもの状態

前の晩に呼吸困難に陥ったことから、人工呼吸器が装着されていた。

2．母親の言動

精神的ダメージが大きく、夜間に倒れており、終始泣き崩れている。

3．学生の実習内容

常に母親のそばにいるように心がけているが、子どもの病状の急変に動揺しており、なかなか

平静を保てない様子であった。

4．指導者のアドバイス

学生は動揺して平静を保てていないが、これは子どもに対する思いの強さであり、母親にとっても自分の感情を表出できることにつながっている様子であったため、その行動を見守ることとする。しかし子どもの病状から、次の日には何が起こっても母親を支え、対応できるようにしておくことが看護援助につながることを学生に伝えておく。

G．実習7日目

1．子どもの状態

呼吸器が装着されていて、頻回に気管内洗浄が実施されている。

2．母親の言動

常に自分の思いを聞いてくれる存在がいることで平静を保ち、やや笑顔も見られるようになる。

3．学生の実習内容

常に病室にいて子どもの病状観察とともに母親が思いを表出できるように援助をしている。しかし看護師によって清拭などの援助が実施されているにもかかわらず、全ての看護援助を見学している。

4．指導者のアドバイス

母親との関係は良好であるが、子どもの急変によって再度子どもに触れることができなくなっている様子である。このまま子どもから距離をおくことがないように、援助すべきところは見学ではなく、実施するように伝える。

H．実習8日目

1．子どもの状態

病状は落ち着いてきてはいるものの、薬物により鎮静されており、すぐに酸素飽和度が低下するなど予断は許さない状態にある。

2．母親の言動

状況に慣れ落ち着いてきており、学生と対話することで自分の母親としての存在を確認している様子である

3．学生の実習内容

子どもに触れることはできないが、笑顔で話しかけたりしている。母親が思いを表出できるように常にそばにいて自ら話しかけている。また酸素飽和度などが低下したりすると看護師を呼んだりと病状への対応を実施している。

4．指導者のアドバイス

実習最終日になっても、子どもに触れることができないことは残念であるが、母親にとっては医療スタッフとの橋渡しとなり、大きな支えとなっている様子である。また看護目標である母親の笑顔が少しでも見られるという点において、緊張は取れないまでも子どもの状況を受けとめ、前向きな姿勢が見られるようになったため目標達成とする。

Ⅳ．考察

小児看護学実習における、学生と子どもおよび母親との関わりについて再考したことによる指導法の変更は、学生に対する母親の信頼感を生み出しただけでなく、それ以上の効果を生み出すことが明らかになった。学生のどのような言動が母親の信頼を得ることにつながったのか、また学生を信頼した母親の言動がもたらす影響を明らかにすることは今後の実習指導において重要と考える。そこで、学生の言動が母親の信頼を得る要因と学生を信頼した母親の言動が影響を及ぼす要因と、小児看護学実習で学生を指導する指導者の役割について検討する。

A．学生と母親の言動が信頼関係に影響を及ぼす要因

1．学生の言動

学生の関わりによって子どもや母親に影響を与えることは、子どもや母親に接する際の態度である。それは子どものことを理解して関わろうとする態度であり、その態度を表すことで親は学生を信頼するようになる。

そのためには、まず子どもや母親に積極的に関わることが大切である。しかし、学生は子どもとの関わりや対応の仕方に戸惑いを感じている姿が映し出されることが多い（阿部, 2002）。本事例の学生も、予測していた子どもの様子と現実の差が激しいことに戸惑いを感じ、子ども

の病態生理を理解できないことから、当初子どもや母親との関わりができない状態にあった。しかし子どもの病態生理を理解できたことで、積極的に関わることができるようになった。常に病室にいるなど母親が思いを表出できるように積極的に関わったことで、母親から子どもへの思いが表現されるようになった。このようにまず病態生理を理解することが重要であるといえる。そして病態生理を理解したうえで積極的な学生の関わりによって、母親は学生を信頼するようになった。また学生は母親からその心情を表現されて初めて親の思いに共感することができていることからも、学生が積極的に関わることは重要である。そして母親から表現された思いを考慮して援助を検討することから、母親の思いに沿った適切な看護援助を導くことにつながり、更なる母親の信頼を得ることができたのではないか。

次に、学生の子どもに対する“かわいい”と思う気持ちが重要である。実習前から半数以上の学生が、子どもが好きと答えているという研究報告がある（塩見, 2001）。しかし、ただ単に子どもが好きということではない。子どもの病気や闘病生活を理解したうえで“かわいい”という気持ちは自然に言動に現れてくる。このため子どもを理解せずに、単に声かけをしても逆効果をもたらすだけであろう。学生が子どもに対して、たとえ反応がなくても“かわいい”と素直に表現し続けたことが、母親の子どもへの認識にまで影響を与えている。またそのような学生の言動が母親にとって助けとなり、感情を表出することにつながっている。

さらに、学生の子どもの状態に合った適切な援助も重要といえる。学生が酸素飽和度低下時にすばやく看護師を呼ぶなどの病状への対応は医療スタッフとの橋渡しともなり、母親の安心を引き出している。いくら声かけができていても、援助が適切でない場合には子どもを理解していることにはならないため母親の信頼を得ることは難しくなる。子どもの状態に合った適切な援助を導くために、学生がケア計画を十分に検討し立案することが重要であるといえる。

最後に学生の立つ位置が重要であると考える。通常学生は母親の後ろに立つことが多く見られるが、母親と同じ側に立って子どもと関わろうとすると、母親の表情が見えなくなる。しかし、本事例のようにベッド上で過ごすことが多い子どもの場合、母親と学生が向き合っていることは、子どもは話すことができなくても、子どもを中心に母親と一緒に子どもを観察したり援助したりできている。そのため学生と母親が同じ目の高さで、視線を合わせて話しをすることになり、学生の子どもへの関わり方が母親に理解されやすくなっている。

2．母親の言動

母親の手助けは重要であるが、母親は実習当初から学生への手助けを行うわけではない。本事例でも学生が積極的に関わるようになって始めて母親の言動が変化しているように、学生の言動によって母親の言動が変化するという相互作用によるものである。

母親の言動において子どもに対する思いの表出は重要である。本事例の母親が、肛門にしか注目できなかったという母親の言葉からも明らかであるように、子どもへの慣れない援助を行なわねばならないために周囲に目を向ける余裕がない状況にある。また、一般的に病気の子どもに付き添っている母親は、わが子の病名告知による「衝撃」がおさまっても、病気とその闘病生活によって生じる様々な問題や悩み事のために「不安」の日々を送っている（新山, 1999）。そのため、目先のことに捉われ易い状況にある。これらのような状況にある母親から、学生の子どもに対する“かわいい”との言動によって、忘れかけていた子どもの誕生を待ち望んでいた親としての希望を思い出したとの思いが表出されている。待ち望んでいた子どもの病状への不安があるだけでなく、慣れない看護援助を実施しなければならないことは母親にとって非常に精神的負担となる。また助けとなるはずの医療者など周囲からの援助も病気に対する援助が中心となるため、その援助がどれだけ子どもを大切にするためのものであるかは母親には届き難い。このような状況にある母親の思いを理解することは重要である。しかし学生は母親の子どもに対する行動や表情から母親の思いを評価するこ

とが難しい。本事例でも母親から子どもに対する思いが表出されて始めて、母親の子どもに対する真摯な言動を理解している。このように母親からこれまでの闘病生活や子どもに対する思いが表出されることが、一番母親への理解ができ、適切な援助を実施することにつながっている。

次に学生が提案する援助を受け入れ、実施しやすいように手助けしたりアドバイスしたりすることが重要である。子どもは母親の働きかけによって学生との関わりを受け入れている様子であることから、母親の存在が子どもの学生に対する受け入れが悪くなる要因になるということは、これまで見られていない（大木, 1998）。むしろ学生が子どもと関わるためには母親の存在は重要と考える。また母親のアドバイスを考慮して検討することで、子どもへの援助が適切なものとなりうる。

さらに、学生に対して評価を表現することが重要である。学生は子どもとの関わりから多くを学ぶが、自身の援助が適切であるかについては絶えず不安を抱きながらも、評価することができない。本事例の学生は特に子どもからの反応がないため、役に立っているのかと不安に思っている。そのような中で母親の言動によって、母親の役に立っていたことがわかってうれしいと語っているように、母親が自分を認めてくれることが最大の評価となり自信につながっている。またたとえそれが悪い評価であっても、学生自身の振り返りができ、以降の学びにつなぐことができる。

B. 指導者の役割

母親の信頼感を生じさせるような看護援助が実習初日から実施できるわけはない。学内演習で習得する技術が、実践場面において役に立つことは多い（布施, 2001）。しかし、実習において始めて実施する技術も存在する。短期間の実習という時間的制約の中で、あらゆる場面での看護援助を実践し評価することは困難である。また看護実践に必要な技術の熟達や問題解決能力については未熟といえる。さらに子どもと関わる経験のある学生は少ない。したがって、西田（2002）が指摘しているように、子どもとのコミュニケーションのとり方や援助に力点をおいた学習は有効である。このような学習によって、学生が子どもと適切な関わりができるよう支援することは指導者の重要な役割である。

指導者の、学生と子どもおよび母親との関係作りにおいて最も重要な役割として、実習前より実習中を通して、母親と指導者の信頼関係を維持しておくことがある。本事例では急遽受け持ちとなったため、実習前の指導者と母親の関わりは皆無であったが、それでも実習当初から指導者が母親のガス抜きを手伝ったりすることで、母親の信頼を得ていた。母親は指導者との信頼関係によって、学生を積極的に受け入れ、子どもとの関わりを促進するなど実習指導の一環を担うようになる。さらに本事例のように母親から指導者に対して、学生への思いが表出されることも、指導者への信頼によるものと考えられる。

母親からの情報を学生に効果的にフィードバックすることも重要な役割である。カンファレンスは学生が困っていることや感じていることから、よりよいケアの方向性を見出したり、子どもや家庭の理解を深めたりすることができる有効な学習方法の一つである（江本, 2001）。本事例のようにカンファレンスで母親の言葉について話し合うことで、一人の学生の学びにとどまらず、学生間の相互の学びとすることも必要である。

次に子どもと関わる経験の少ない学生に対して、子どもとの具体的な関わり方を示すモデル提示が指導者の役割として重要となる（阿部 , 2002）。学生が子どもと関わりが持てるように、実習初期に指導者が率先して子どもに声かけや触れたり、抱いたりすることは学生の子どもへの関わり方のモデルとなっており効果的である。本事例で実際に子どもを抱くことで子どもへの不安を減少させ、子どもに触れることへの抵抗が少なくなったことからも、指導者が抱き上げた子どもをそのまま学生に抱かせることも効果的といえる。

さらに学生自身が適切な看護援助を導くための病態整理等の理解への援助が必要である。指

導者は学生に体験の機会を与えることはできても、体験そのものを与えることはできない。実習教育には指導型と学習援助型がある（安酸，2002）。一般的には多くの体験の機会を与えようとして援助を押し付ける指導型に傾きがちになる。本事例では関連図を描くことによって、学生自身が子どもの病態生理を理解し、子どもへの適切な看護援助について論理的に検討し、さらに援助に対する子どもや母親の反応の意味についても検討する事ができるようになっている。

最後に看護目標の立て方への援助も重要な役割である。具体的な看護目標を立てることができるように援助することで、学生はケア計画の立案および実践を容易に行うことができる。本事例で学生は母親の笑顔を見られると目標を立てたことで、常に病棟にいて母親の思いを傾聴するなどの具体的なケア計画を立案できた。そして目標達成することによって学生の自信を引き出すこととなる。

V．おわりに

母親の信頼を得るためには、学生の子どもおよび母親への基本的姿勢が重要であり、さらに学生を信頼した母親がもたらす学生への影響は大きい。指導者が十分に個々の学生の悩みや気持ちを把握しきれず、十分な指導にならない現状がある（阿部, 2002）。しかし、指導者は学生に対して母親の信頼を得ることができるように適切に支援することが重要である。同時に指導者は母親に対して働きかけることも大切である。小児看護学実習において、学生と子どもおよび母親との信頼関係を築くためにはますます指導者の役割が重要となるであろう。

謝辞

小児看護学実習のために、学生を受け入れてくださった岡山大学医学部附属病院小児内科小児神経科に入院していたお子様方と、学生が子どもたちと関われるように工夫をしてくださったお母様方に深く感謝いたします。また学生が子どもへの援助を実践するのを見守ってくださった小児内科病棟のスタッフの皆様に深謝いたします。

最後になりましたが、実習のためのご指導ご支援を頂きました母子看護学講座の小田慈教授と太田にわ教授に深謝いたします。

文献

阿部さとみ他 (2002). 看護系大学における小児看護学実習に関する臨床指導者の認識と課題. 小児看護, 25(4),522-528.

飯村直子他 (2001). 看護系大学における小児看護学実習の概要 . 日本小児看護学会誌 , 10(2),16-21.

江本リナ他 (2001). 看護系大学における小児看護学実習の準備と実際. 日本小児看護学会誌, 10(1),59-63.

大木伸子他 (1998). 小児看護学実習を問う―付き添いのいる病院での実習体験の記述から―. 小児看護, 21(12),1650-1659.

Gaberonh. K.B他（1999)／勝原由美子監訳 (2002). 臨地実習のストラテジー. 東京.

布施晴美他 (2001). 小児看護臨床実習に向けての小児看護技術教育のあり方. 埼玉県立短大部紀要, 3,41-49.

新山裕恵(1999). がん子どもを支える母親の内的過程―発病期から末期以前まで―. 看護研究, 32(2),105-118.

西田志穂他 (2002). 小児看護学実習モデル―実習の実際―. Quality Nursing, 8(11),961-969.

塩見美幸他 (2001). 小児臨床実習における遊びの援助の実態と学生の学び. 日本小児看護学会誌, 10(1),64-72.

園田悦代 (1995). 小児看護学実習の意義と指導. 園田悦代編. 小児看護学実習指導の手引き, (pp1-9), 東京都.

安酸史子 (2002). 臨床実習教育の理論. 藤岡完治他編, 学生とともに創る臨床実習指導ワークブック第2版. (pp.8-42), 東京.